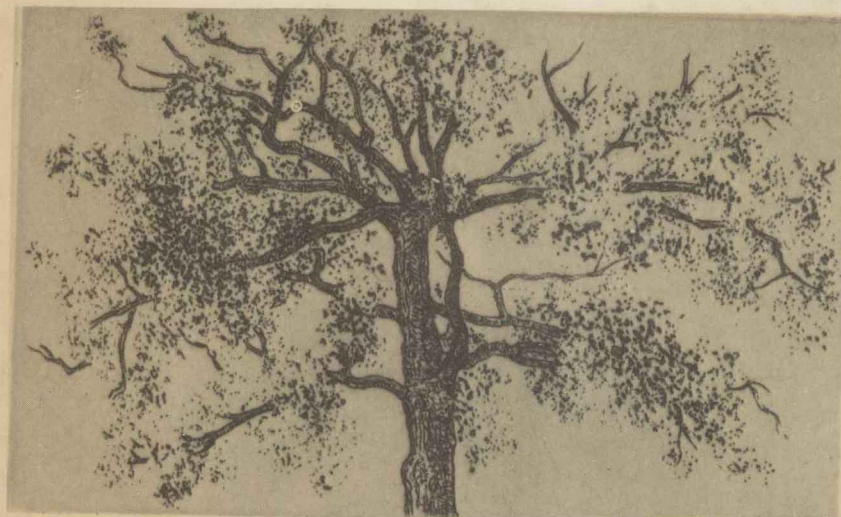


中村稔詩集

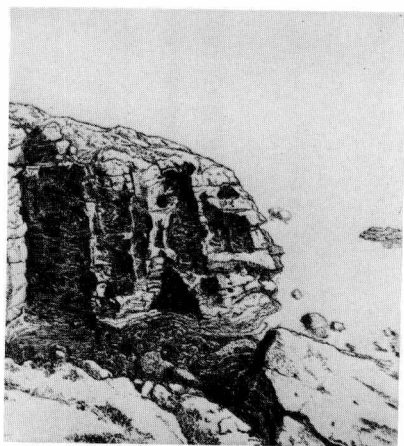
羽虫の飛ぶ風景



中村稔詩集

羽虫の飛ぶ風景

青土社



羽虫の飛ぶ風景

© 1976, Minoru Nakamura

昭和五一年六月五日印刷

昭和五一年六月一五日発行

定価——二四〇〇円 1092—200018—3978

著者——中村稔

発行者——清水康雄

印刷所——三喜堂印刷

製本所——美成社

発行所——青土社 東京都千代田区神田神保町一—二九 市瀬ビル 〒101

(電) 二九二—七〇七六 振替東京九—一九二九五五

装幀——駒井哲郎

羽虫の飛ぶ風景

装帧
驹井哲郎

I

鵜原新唱

大潮の磯にて

だらだら坂を浜へ降りてゆけば

道端に白つめくさの花、浜だいこんの花、

大潮の磯はこうめ島から長入^{なげり}へ

吉尾からさらに松部へまで続いている。

——私がここに在ることは本当なのか？

岩と岩の間を流れる玻璃に似た潮、

岩蔭の褐色の藻、みどり色の藻、

海胆やとこぶし、また鮑を採る女たち。

私はまさにここに在るのだが、しかも

氾濫する光に惑いながら

風景に溺れるひとつの点である……。

煦々としてわたる陽、海食崖の灰色の肌、

つややかな岬の樹々、

こんなに潮が退いて、今日の海は遠いのだ。

まだ早い夏

つややかな照葉樹林の隙間から

あじさいの花が咲きこぼれ

海には藍がながれるとき、それでも
踝を濡らす水はまだ冷たい。

そのあじさいよりもうつろいやすく

魚介よりも言葉なく

季節から季節をめぐり

光の微塵のなかにほろびゆく生物たち。

渚をあゆみ、低い雷鳴を聴き

季節の確実な訪れを知り……

海よ！ 落陽が緋にそめている岩礁よ！

またかいまみる時があるか？

眩しい沖合に静止した夏が

黄金の蒸気を噴きあげている午前を。

また真夏の海に

内湾を扼している左右の岩壁、

そのなかのささやかな三つの入江。

入江という入江に潮が満ち、

岩棚を隠して水晶に似た波がながれる。

めまぐるしく風化する事物、

その間を、もっとあわただしく

駆けぬけてゆく私たち、その眼が

かいまみるつかのまの生の光芒。